

# ノーサイド

## 禍害と被害を超えた論理の構築

### (22)

## 中村周平

Wheelchair Football というスポーツとの出会いは、同時に「糸賀亨弥さん」というスポーツの指導者の方との出会いでもありました。頸髄損傷者連絡会という組織の新年会で糸賀さんと初めてお会いしたとき、天理大学体育会アメリカンフットボール部でGM(ゼネラルマネージャー)をされていることは教えてもらいましたが、それ以外のことはまったくわかっていませんでした。

「どうして、大学スポーツのGMが車いすスポーツに関心を持つようになったんだろう？」

正直興味はありましたが、出会った当初は聴くことに躊躇してしまう自分がいました。糸賀さんご自身は非常にフランクで気さくな方でしたが、自分自身が上下関係を厳守していた頃の癖が抜けておらず、何か聞くにも緊張してばかりでした。それでも、Wheelchair Football を通して糸賀さんと関係性を築いていく中で、これまでのエピソードについても徐々に話を聞くことができました。

糸賀さんが天理大学体育会アメリカンフットボール部で指導者として活動されていたとき、公式戦で天理大学の選手が事故に遭いました。私と同じ、頸

髄を損傷する大きな事故だったそうです。選手は、車いすでの生活を余儀なくされました。事故後、糸賀さんは病院で選手のご両親から「息子がアメリカンフットボールをプレーしているところを見ることは叶わなかった」というお話を聞いたそうです。「もう一度、彼(事故に遭った選手)にアメリカンフットボールをやってほしい」・・・そのような願いから、実現できる方法を模索されていきました。そして、少ない情報の中からアメリカに車いすでアメリカンフットボールをプレーするスポーツがあることがわかったのです。単身アメリカに渡り、そこでWheelchair Football の基礎を学び、日本に持ち帰りました。そして、Wheelchair Football Japan という組織を立ち上げ、「障害の有無に関係なく、誰もが楽しむことのできる『車いすスポーツ』」として国内での普及に取り組みされていくことになりました。大学スポーツのGMと車いすスポーツとの接点が、そこで初めて理解することができました。おそらく、糸賀さんには確証も当てにできるものも無かったと思います。ただ、選手に対する糸賀さんの想いが、アメリカでしかおこなわれていない Wheelchair Football というスポーツとの接点を作り出したのではないかと、私は話を聞いていく中で感じていました。

また、怪我をした選手についても少し話をしてくれました。そして、話を聞いていくうちに、その公式戦で事故に遭った方のことは、実は以前から知っていたことがわかってきました。同じ障がいのある方々のコミュニティや新聞などで幾度も話題に挙がっていた方でした。事故後、かつてのチームに復帰し、コーチという指導者の立場で現役の選手たちと向き合われていると。その方の現状を知ったとき、私は驚きを隠せませんでした。「スポーツで怪我をした人間が、このような形(指導者という立場)で再びチームに戻るができるなんて・・・」。スポーツでの事故、とくに学校スポーツで事故に遭えば、原因の究明や経済的支援を模索していくうえで相手側との話し合いが持たれます。(残念ながら、持たれなかったケースもありますが)しかし、多くのケースで話し合いにおける折り合いはつかず、事故被災者がすべてを引き受ける(被害を抱え込む)か、裁判という手段しか残されていない現状を何度も耳にしてきました。前者の場合、重篤な障害を被った事故であったとしても十分な経済的支援もおこなわれないことが多く、事故被災者やその家族にとっては非常に厳しい現実が待ち構えています。また、原因の究明についても課題はあります。映像が残されていない場合、調査は聞き取りが中心となりますが、その多くはチーム関係者によっておこなわれます。そうなれば、自分の発言が誰かを加害者にしてしまうのではないかという危機感から客観的な調査が困難になる傾向があります。後者であれば、裁判に勝訴すれば学校側に賠償責任が生じるため損害は補填されますが、それによってチームとの関係性は崩壊してしまいます。何より、避けることが難しい事故の場合、過失責任を立証すること自体が困難であるにもかかわらず、損害を補填するためには「事故を起こした責任」を誰かが負う必要があり、それによって裁判で勝訴するしかありません。

前者、後者ともに多くの課題がある中で、このようにチームに戻り指導者の立場で活躍されていることは、驚きを越えて、ある意味うらやましくも感じ

ていました。その方と糸賀さんが選手と指導者の関係であることは、さらに驚くべき事実でした。

「こんなことってあるんやなあ。ラグビー以外のスポーツはやらないって言ってた自分に、**Wheelchair Football** というスポーツを教えてくれた方の教え子が、まさか自分と同じ怪我をしていたなんて。」

きっかけは **Wheelchair Football** でした。だから、このような気持ちになるのは不謹慎だったかもしれませんが。ただ、同じ事故被災者ということもあり、お二人の関係性に強い関心を持たずにはいられませんでした。

「事故後の対応はどうやったんやろう？お二人の関係性は？事故に遭った彼はどうやってチームにもどったの？」

そして、お二人の今の関係性を知ることが、スポーツ事故における禍害と被害を越えた関係性を構築していくうえで、その一助となってくれるのではないかという希望もどこかに感じていたのだと思います。しかし、それは糸賀さんにとっても辛く、思い返したくない事実ではないかとも思いました。

「糸賀さんは指導者として事故を目の当たりにした。事故に遭った方も、もちろん大変やったやろうけど、たぶん、糸賀さんもいろんなことを抱えているんじゃない」

糸賀さんにとって辛い過去である事故のことやこれまでのこと。今は聞けないと思いました。それを聞くために **Wheelchair Football** をやっているというように誤解も与えたくありませんでしたし。でもいつか、そんな話を聴かせてもらえるぐらいの関係を **Wheelchair Football** を通して作っていきたい・・・当時は、そんなことを頭の片隅で感じていました。